

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



ミニストップ郡山麓山店（福島県郡山市）のイートインコーナー。ラジオ体操とウォーキングの住民グループが、毎朝の活動後にお茶飲みをする

## 特集 『地域のお店』は 集いの場

- 誰もが気軽に集う、地域の「茶の間」③  
ヤマザキショップ岩間商店（岩手県大槌町）
- 小さな食料・雑貨店は、地域福祉の拠点⑤  
渡部商店（福島県昭和村）
- コンビニのイートインでサロンを⑦  
ミニストップ郡山麓山店（福島県郡山市）

☆専門家に聞く地域づくりのヒント  
（福島大学 行政政策学類 教授 鈴木典夫さん）

生きがい仕事⑨  
南三陸石けん工房（宮城県南三陸町）

【特別記事】お年寄りを見守り、いつまでも暮らせる地域づくり⑩

私の地域の元気興し「S-1 グランプリ 第2回いがす大賞」⑫  
「工作の森」（宮城県仙台市）

インタビュー あの人に会いたい⑪⑬  
荒井小学校用地応急仮設住宅自治会 会長 安達 董さん（宮城県仙台市）

仮設住宅整理統合時の課題と対策⑭⑮  
（社会福祉法人 長岡市社会福祉協議会  
本部事務局地域福祉課 課長 本間和也さん）

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ⑯

場の力⑰⑱  
障がいの有無も年齢も飛び越えた、みんなの居場所  
特定非営利活動法人わらいの館四季（宮城県登米市）

／ 特集 ／

# 「地域のお店」



# 集いの場

／ 商店を「いつでも行けるサロン」に ／

「地域のお店」（どちらかと言うと規模の小さな）を観察すると、店内に、あるいは店舗に隣接して、

イスやテーブルが置かれていたりします。

コンビニやスーパーでは、「イトインコーナー」などと呼ぶこともあるようです。

しばしば、そこに人が集まっているのを見かけます。

お茶を飲み、お菓子や軽食をつまみながら、おしゃべりに興じています。買いのもののお客さん？ それとも、お茶飲みに来ている人？

どちらにしても、なんだかリラックスして打ち解けた、いい雰囲気です。

高齢の、特にひとり暮らしの人には、

商店に設けられたこのちょっとしたスペースが、

日中のたいせつな集い場になっていることがあります。

店の営業時間中なら、いつでも好きなときに行けて、

帰りたいときに帰れる…もちろん買い物もするけれど、

本当は、仲間と会って楽しく話せるのが何よりも楽しい、だから毎日のように足を運ぶ…

「地域のお店は、毎日好きな時間に行けるサロン」

そう思ってみてみると、商店の隠れた重要性が明らかになります。

今号の特集では、仮設住宅団地と、30万人規模の都市と、

人口1300人ほどの小さな村の、

それぞれの「地域のお店」を紹介します。





岩間商店の休憩所には、仮設住宅や災害公営住宅の入居者、地域住民らが引きも切らず訪れる

## 誰もが気軽に集う、地域の「茶の間」

◎ヤマザキショップ岩間商店（岩手県大槌町）

ライター：元持幸子

### ポイント

- 売り場とは別に「集い場」スペースをつくった。買いものをしなくても、誰でも自由に利用できる。
- 地元住民だけでなく、外部からのボランティアも交流や情報交換を目的に訪れる。店の前の広場はイベント会場にも。

「藤の具合はどうだ？」  
「あまりよくないねえ」  
「あいつの姿が見えないな、どうした？」  
「旅行にでかけてる」

商店の店先に、仮設住宅で暮らす被災者が集まっている。世間話に花を咲かせてながらも、お互いの体調を気遣い、仲間の消息を確かめ合う。

岩手県大槌町の大槌第7仮設住宅団地（柵内地区）にある「ヤマザキショップ岩間商店」。店主も地元の被災者で、この店自体、プレハブの仮設店舗だ。

同仮設住宅団地は、設置戸数59戸、今年8月末時点で41戸に計89人が暮らす。ピーク時130人以上入居したが、災害公営住宅への入居や住宅の自主再建が進むにつれ、徐々に減ってきている。

### 買いものよりお茶飲み

店の正面玄関を入ると、風除室のような左右に細長い小部屋がある。そこからもう一枚扉を開けて、売り場に入るようになっていく。この小部屋は、店舗正面

の軒を延長し、手づくりの壁で囲ったもの。来店者のための休憩所となっている。4畳ほどの広さにテーブルやイス、テレビ、ポットなどが置かれ、来店者が自由に使える。冬には薪ストーブも持ち込まれ、とても暖かい。7〜8人も入れば満員になる程度の、簡素な造りのちょっとしたスペースだが、不思議と居心地がいい。

店が開く朝7時から閉店時間の夜8時半まで、ここには多くの人が入れ替わり立ち替わりやって来る。

仮設住宅や災害公営住宅の入居者、地域住民も訪れる。お茶をいただき、おしゃ



外にはバラソル付きテーブルとイスが



## 岩間商店 店主 岩間 秀夫さん

「ここに来ると、誰かに会える、みんな笑顔になれる…  
そんな場所であってほしい」

べりを楽しむ。あるいは、テレビを観る、新聞を読む、居眠りをする…

「買いものついで寄って行く人はもちろん、散歩や仕事の途中で休んでいく人も利用でき、開店時間中ならいつでも好きな時に来て、帰っていい。高齢者にとっては、貴重な日中の集い場となっている。」

「安いものよりも、誰かに会うとか、のんびりお茶飲みをするとか、そういうことのために来る人のほうが多いかもしれないね」

そう語るのは、店主の岩間秀夫さん（62歳）。

「ここでは一日のうちいろいろな出会いや出来ごとがあつて、まるでドラマを見ているようだよ」

週末や休日には、町外に避難した人や、ボランティア活動などで町に関わる外部の人たちも集まる。離ればなれになった友人知人、親類同士が再会し、町の復興や自分たちの生活について、情報のやりとりをする。

また、店の前の広場は、自治会や支援団体のイベント会場として使われている。

「ここに来ると、誰かに会える、みんな笑顔になれる…そんな場所であつてほしいね」

実際、そうになっている。もはや単なる商店ではない。広場や休憩所も含め、誰もが気軽にくつろげる地域の茶の間であり、地域と外部をつなぐ社交場であり、交流と支え合いを生み出す拠点になっている。

### 困難を一緒に乗り越える

近辺には、ほかに商店はない。自動車などを持たない人には、歩いて買いたいものに行ける唯一の店だ。売り場には、生鮮品を含む各種食料品や日用雑貨などの生活必需品がひと通りそろっている。

買いために不便な仮設住宅団地は、ほかにも多くある。岩間さんは、移動販売車を走らせ、買いたいの弱者の支援にあたっている。

震災前、店は町の中心市街地に立地。創業60年の地元老舗として、大手製パン会社系のコンビニへ業態転換してからも、地域密着の営業姿勢で町民から親しま

れていた。津波で市街地は壊滅し、店も全壊した。

生業と住まいを失い避難生活を始めた岩間さんは、

山間地域に整備された仮設住宅で、買いたいの難民となった高齢者の姿を目の当たりにする。少しでも仮設住宅での生活環境を改善させようと、仮設店舗の開業を決意。震災から4か月あまり経った2011年7月25日、オープンにこぎ着けた。同年10月12日には、取引先の支援を受けて移動販売車を確保、町内の各仮設住宅団地での巡回販売をスタートさせている。

「町の復興と住民の暮らしの再建に向けて、困難な状況をみんなで一緒に乗り越えていきたい」

そう語る岩間さんは、実は、同仮設住宅団地の自治会長を務めている。商店経営に地域づくりの考え方が色濃く反映されている背景には、住民活動のリーダーとしての知識や経験もあるのだろう。

同仮設住宅団地がある榎内地区には、今年1月、一戸建てタイプの災害公営住宅13棟が完成し、全棟入居

済みとなっている。近隣の大桤地区でも来年4月の入居開始を目指し、長屋タイプ計24戸の整備が進む。

災害公営住宅の入居者にとつても、店はたいせつな存在だ。とはいえ、いつまでも仮設店舗のまま営業し続けることはできない。

岩間さんは、店舗の再建を検討している。時期や場所が決まっていなくても、新しい店もきつと、地域の茶の間として住民に愛されるに違いない。

### DATA

#### ヤマザキショップ岩間商店

震災前は、岩手県大槌町沿岸部の中心市街地に立地していたが、市街地は津波で壊滅的被害を受け、店舗も全壊。2011年7月25日、大槌湾の海岸線から約6km内陸に入った榎内地区の大槌第7仮設住宅団地内に仮設店舗を開業した。同年10月12日以降、移動販売車によるほかの仮設住宅団地への巡回販売も行っている。所在地は大槌町大槌第12地割榎内180-1。営業時間は午前7時から午後8時半まで。年中無休。電話0193-42-4022



店舗兼住宅の売場の奥にある居間で、お茶飲みや食事、おしゃべりを楽しむ(右奥が店主の渡部静子さん)

# 小さな食料・雑貨店は、地域福祉の拠点

わたなべ  
◎渡部商店(福島県昭和村)

## ポイント

- 商店だから気軽に行ける。お茶や食事をごちそうになる代わりに、買いものをして帰る。
- 店主と客、客同士が連絡を取り合って、心配な人の見守りを行っている。

福島県昭和村の野尻地区にある「渡部商店」<sup>わたなべ</sup>。10坪ほどの売り場には、菓子、缶詰、レトルト、乾麺、調味料などの食料品や、洗剤、ティッシュ、トイレットペーパーといった雑貨類が並ぶ。

50世帯109人(10月1日時点)が暮らし、高齢化率が57・8%に達する同地区で、最も人が集まりやすい場所だ。地区で唯一、食料品を扱う店ということもあるが、客はむしろ、店主の渡部静子さん(80歳)を慕ってやってくる。

### 店は高齢者の集いの場

「いだがー?(いるかー?)、買いに来たー」  
「いだよー(いるよー)、お茶飲んでいがつしー(飲んでいってー)」

客が売り場から居間に上がると、渡部さんはすかさずお茶を出し、菓子や漬け物、心づくしの手料理の数々でもてなす。伝統的な田舎料理に独自の工夫を加えた味付けが評判で、レシピを教わっていく人も多い。料理の得意でないひとり暮らしの高齢男性のためにと、いつも多めにご飯を炊き、おかずをつくっている。

彼らが店に来ると食事をとらせ、帰るときには余ったおかずを持たせてやる。

「私は料理をつくるのが大好き。人に食べてもらえるのが嬉しいの。みんながここに来てくれるのが、とてもありがたいよ。これは私の生きがい」  
そう言って、渡部さんはほほ笑む。

店は54年前、夫の故・六郎さんと二人で始めた。以前はプロパンガスや金物、履き物、タバコなども扱っていたが、9年前に夫が亡くなったのを機に、品揃えを食料品と日用雑貨だけにした。二人の息子は独立して関東地方に住んでおり、店は渡部さんが一人で切り盛りしている。

店でお茶飲みや食事をする客は、少ない日で3〜4人、多いと7〜8人近くにもなる。ほとんどが70〜90歳代の高齢者。

毎日決まった時間に来て、お茶飲みとおしゃべりを楽しんで帰って行く人、家族の介護など、生活上の悩みを打ち明ける人、前の日に手料理をリクエストし、それをいただいで帰っていく人…実にさまざま。

買いものついでというより、お茶飲みに来たついでに買いもの



## 渡部商店

### 店主 渡部 静子さん

「みんながここに来て、お茶を飲んだり食事をしたり、おしゃべりをして楽しく過ごしてくれる。それが私の生きがい」

のをしているように見える。これについて近所に住む男性は、「いくら田舎でも、普通はそんなに毎日のように特定のお宅にお茶飲みや食事にいけるものじゃない。お店だから行きやすいのだろう。お茶や食事をいただく代わりに、買い物をして帰る。だからあまり気兼ねがない」と説明する。男性の90歳代の母親も常連客の一人。

この店を高齢者向けのサロン、またはデイサービスの一種と考えれば、買い物をする事で客は「利用料」を払っているのと同じことができる。

ただ、渡部さんも客たちも、「利用料」を意識しているわけではなく、「お互いさま」のご近所づきあいといった感覚らしい。

「お互いさま」のあり方もまた、人それぞれ。70歳代の男性はトマト、ダイコンなどの野菜や、ワラビ、ゼンマイ、フキ、キノコといった山菜類を手土産に持つて来る。同年代の別の男性は、渡部さんの畑仕事や草刈り、雪かきを手伝う。それも本人が知らない間に「黙ってやってくれている」渡部さんという。お互いが、できることを交換し合っている。

#### 見守りもしっかりと



渡部商店の店舗兼住宅

店は、渡部さんが体調を崩したりしない限り、年中無休。毎日開くサロンのようなもので渡部さんと客たち、あるいは客同士の間で、店を介して自然に見守り合う関係もできている。

今年7月のある日、こんな出来ごとがあった——煮物をつくった渡部さんは、近所に住む高齢女性Aさんに食べてもらおうと電話をかけたが、応答がない。すぐ別の常連客Bさんに電話し、「店に来るついでにちょっとAさんのところに寄って様子を見てきて」と頼んだ。やがてBさんが来店し、「Aさんの家は玄関に鍵がかかっている、呼んでも返事がない。まわりの人の話では、どうも病院に行ったらしい」と報告。あとになって、実際にAさん

が病院で診察を受けていたことがわかった。体調に大きな問題はなく、後日元気な姿を見せた——。

渡部さんは、牛乳と乳酸菌飲料の配達もこなす。対象はそれぞれ地区内の4〜5軒ほどで、すべて高齢者世帯。これが実質的に訪問型の見守りになっている。

店は、サロン、地域食堂、配食、見守りなどの拠点になっている。

さらに、渡部さんはこんな考えも語ってくれた。

「隣の畑でみんなと一緒作業をして、収穫した野菜で食事ができればいいな——」

店は将来、畑仕事をとおした健康づくりの場にもなるかもしれない。

昭和村は、周囲を山々に囲まれた県内有数の豪雪地で、人口1363人（10月1日時点）。川筋に沿って10の集落があり、古い農家造りの家々が、肩を寄せ合うように並ぶ。村全体の高齢化率は54・6%。データだけを見れば、生活環境の厳しい、過疎が進んだ限界集落と言える。ところが、なぜか実際の年齢より若く、元気な高

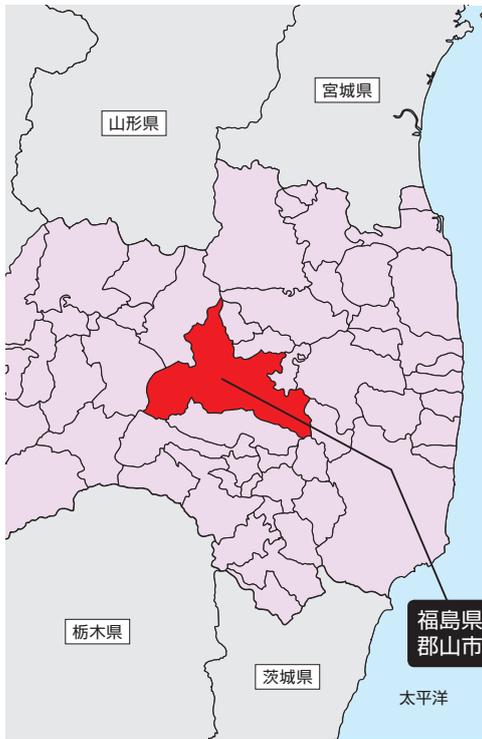
齢者が多い印象を強く受ける。80〜90歳代でも、自宅でひとり暮らしを送る人は、珍しくない。そうした人たちの多くが、「別に寂しくない。毎日楽しい」と口をそろえる。

村には、渡部商店のような高齢者の集い場があるだけでなく、お互いの家を気軽に行き来し、お茶飲みをする習慣も残っている。住民同士のつながりは密接で、困っている人がいれば、当然のように手を差し伸べる。そうした生活文化が、高齢になっても地域で生き生きと暮らし続けるのに大いに役立つている。木

#### DATA

##### わたなべ 渡部商店

扱いは食料（菓子、缶詰、レトルト、乾麺、調味料など）と雑貨（洗剤、ティッシュ、トイレトーパー、野菜の種など）。牛乳や乳酸菌飲料の配達、宅配便の取り次ぎも行う。所在地は福島県昭和村野尻元町4519-1。営業時間はおおむね午前7時ごろから午後6時半ごろまで。原則として年中無休だが、店主の都合により随時休業あり。電話 0241-57-2547



ミニストップ郡山麓山店の芳賀清さん、栄子さんご夫妻。それぞれオーナー、マネージャーとして店を切り盛りする

# コンビニのイートインでサロンを

◎ミニストップ郡山麓山店（福島県郡山市）

## ポイント

● ちょっとした飲食スペースがあれば、コンビニでもサロンを開ける。会場にできる場所は全国無数！

どのコストが掛からず、カップコーヒー1杯なら一人100円で済むことなど。同会は、市中心部の麓山公園に隣接するNHK郡山支局前で毎朝、市民が自主的に集まってラジオ体操を

運動のあとはコンビニへ  
公園でのラジオ体操と周辺エリアのウォーキングで軽く汗を流したあと、コンビニのイートインコーナーに立ち寄って喫茶とおしゃべりを楽しむグループがある。前号（第37号）の特集記事で取り上げた福島県郡山市の「ラジオ体操&歩こう会」だ。  
体操、運動、喫茶、おしゃべりの組み合わせは、集会所などで開かれるサロンとも共通するが、同会の活動は、一般的なサロンより優れた点がいくつかある。たとえば、雨天を含め毎日行っていること、メンバー各自が自主的に参加・運営していること、会場費などのコストが掛からず、カップコーヒー1杯なら一人100円で済むことなど。



イートインコーナーで喫茶を楽しむ「ラジオ体操&歩こう会」のメンバー

「メンバーの皆さんは、いつもコーヒーやお茶を飲む今や欠かせない楽しみに

行くなかから、体操後にウォーキングを楽しむ人たちの輪が広がって生まれた。メンバーは60〜80歳代の男女12人。このうち、コンビニでの喫茶には、少ない時で6人、多い時では8人ほどが参加する。  
そのコンビニは、「ミニストップ郡山麓山店」。イートインコーナーのカウンター席には、イスが6脚置かれていて、7人以上で利用したい場合や先客がいるときには、店員が折りたたみイスを出してくれる。

みながら和やかにおしゃべりなさってます」と同店マネージャーの芳賀栄子さん(60歳)。

「皆さんのほうから『うるさくないですか』と氣遣ってくださいます。『全然そんなことはありません、いつでも来てください』と申し上げています。体操やウォーキングのグループだと知ったのは2、3か月前。そういう活動の一環で当店を使ってもらえるのは、とても嬉しいですね」

メンバーが店を訪れるのは、朝7時40分ごろ。店内で過ごす時間は30分前後。運動でほてった体を落ち着かせ、気持ちを日常の暮らしへ切り替えるのにちょうどいいようだ。同店開業前は、ウォーキングが終われば、各自家へ帰るだけだった。

「ミニストップができてよかった。ここに寄るのは、もう欠かせない楽しみですよ」とメンバーの女性。日々の生活リズムを整えるだけでなく、メンバー同士の親交をより深めることにもつながっているという。

芳賀さんは、「自分も年

を取って店の経営から退いたら、夫や仲間と気軽に集める店が近所にほしいと思います。この店も地域の集いの場として、住民同士の交流や見守りに役立つようになればいい」と思い描く。ちよつとした飲食スペースがあるだけで、コンビニもサロン会場になりうる。さらに、店側と保健・福祉の専門職との連絡体制を整えられれば、よろず相談のつなぎ役にもなるだろう。小さな店にも、地域福祉の大きな可能性がある。木

DATA

はやま  
ミニストップ郡山麓山店

郡山市の中心市街地「麓山地区」に、2013年8月2日オープンした。麓山公園から「はやま通り」を西へ400mあまりのところにある。店舗は、コンビニエンスストアとしての標準的な売場のほかに、6人程度利用可能なイトインコーナーを備える。年中無休、24時間営業。所在地は麓山2丁目12-25、電話024-934-6552

東日本大震災  
私の地域の元気興し



支え合い

S-1グランプリ 参加者大募集!  
第3回 いがす大賞

「S-1グランプリ」は、東日本大震災など、災害後の生活を生きいきとした輝きで彩る、支え合い活動などの様子を発表してもらうコンテストです。

応募書類をもとに予選審査を行い、予選通過者は、2016年2月20日(土)にエル・パーク仙台で開催する本選に出場できます。会場での発表を審査委員や観客の皆さんが審査し、特に素敵な取り組みを表彰します。

コミュニティづくりや地域づくりなどに取り組んでいる、多くの皆さんのご応募をお待ちしています!

●表彰

- 大賞 10万円 + 副賞
- 準大賞 3万円 + 副賞
- 活動提案賞 3万円 + 副賞

●審査基準

- おらほ度 ⇒ 自分らしさ、やりたいこと、思いが前面に出ている。
- おもせ度 ⇒ 内容がとにかく面白い。
- のさる度 ⇒ 誰でも気軽に参加でき、いきおいがある。
- おがる度 ⇒ 今後の成長に期待できる。
- いがす度 ⇒ これぞいがす! 直感に訴えかけるものがある。

●応募締め切り

募集要綱・応募用紙を、CLCのホームページからダウンロードし、2015年12月4日(金)までに応募書類をお送りください。(募集期間を延長しました。)

●応募先・お問い合わせ先

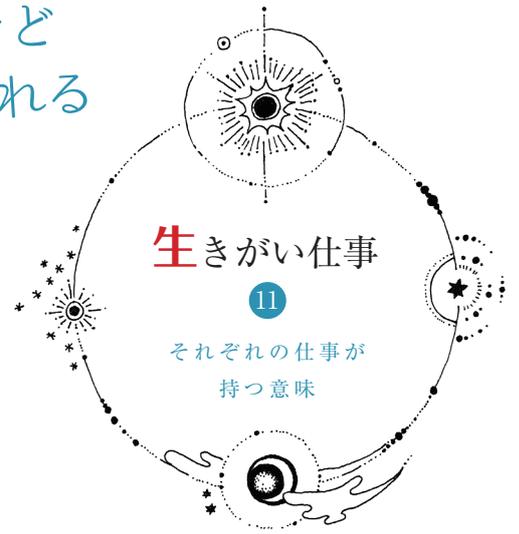
「S-1グランプリ 第3回いがす大賞」実行委員会  
事務局 全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)  
〒981-0932  
宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1F  
TEL 022-727-8730  
FAX 022-727-8737  
HP <http://www.clc-japan.com/>  
担当: 小野寺 知子、清野 哲史



# 海藻、シルク、ハーブなど 南三陸の特産品でつくられる カラフルな石けん

Writer 熊谷智美

南三陸石けん工房（宮城県南三陸町）



代表の厨勝義さんは福岡県出身。東日本大震災の2週間後に、支援物資を携えて南三陸町に入り、その現状に愕然とした。物資を届けただけでは不十分だと感じ、再び南三陸町を訪れ、ボランティアや企業の支援の受け入れ活動のほか、がれき撤去など多彩な活動を行ってきた。震災の翌年からは、南三陸町を拠点に起業を志す人たちの支援に力を入れてきた。

「かわいい」「ステキ」と好評の、カラフルなキューブ状の石けんが「南三陸石けん工房」のメイン商品だ。

## 起業支援から仕事づくりへ

理由のひとつは、仮設住宅の集会所で行われていた石けんづくりのワークショップだ。これまで集会所での多様な活動を見てきた厨さんが、「参加者がイキイキとして、こんなに盛り上がるのか」と驚いたのが石けんづくりだったという。近隣に競合する事業所がなく、地元の生産物を活用できるこ

## 地元の特産品が 個性的な石けん

現在、生薬やハーブなど、さまざまな素材で試作を繰り返しており、今後はハーブなどを育てる仕事も生み出せるのではとの期待もある。商品は女川町のきぼうのかね商店街内の直営店での

震災から3年が過ぎ、起業支援のニーズが減少してきたところ、今度は自分が南三陸町で仕事づくりをすることを決意した。

カラフルな石けんの色は、ワカメやアカモクなどの海藻、シルク、炭などの素材の色。どれも南三陸で採れたり、生産されているもので、石けんに入れるときには、乾かして粉碎し、粉状（あるいはペースト状）にしたものを使用する。つまり、それまでは捨てられていたような切れ端も活用することができる。



10月1日、きぼうのかね商店街に店舗オープン！



素材の色がそのまま石けんの色に



代表の厨勝義さん

販売のほか、仙台市内や東京などのお店で扱ってもらう計画もある。

「地元の若い女性に喜ばれています」と厨さんはいう。ほかの地域に住む人への贈り物などにも利用されているそう。魅力的な特産品は、経済だけでなく、地域の人の気持ちを明るくもする。

### DATA

#### 南三陸石けん工房 株式会社アイローカル

宮城県南三陸町志津川字黒崎44-1  
TEL 0226-25-7476  
URL <http://www.i-local.co/>

# お年寄りを見守り、いつまでも暮らせる地域づくり

福島県南会津町では、同町社会福祉協議会の「高齢者見守り支援員」（以下、支援員）が、戸別訪問やサロンの運営支援などをおして、お寄りが元気に生活できる地域づくりに取り組んでいる。

同町の支援員の活動は、社協が町から受託している「高齢者見守り支援事業」によるもので、2011年度から継続されている。同町社協は、田島地域（旧田島町）の本所と西部地域（旧館岩村、旧以南村、旧南郷村）の支所の2か所に事務所を設けており、現在それぞれ別の事務所に2人ずつ、計4人の支援員が配置されている。



## 住民に寄り添って生活を見守る

戸別訪問の主な対象となるのは、65歳以上のひとり暮らし世帯や、世帯員すべてが65歳以上である高齢者世帯。そのなかで、民生・児童委員（以下、

民生委員）との協議において、訪問の必要性が高いと判断された世帯を訪問する。また、年齢等の条件を満たしていなくても、認知症が進んでいたり、ひとり暮らしだったりという理由で、町や民生委員から、訪問の要望が出された世帯にも訪問を行う。支援員が訪問する頻度は、「1週間に1回」から「3か月に1回」まで、家族構成や身体の調子など、生活の状況を考慮したうえで5段階に分けられており、2014年度には、町内の約650世帯のうち、800人ほどを訪問した。訪問件数は、延べ6500件を超えた。訪問先では、顔を合わせて住民の安否確認をし、

困りごとなどを訪ねる。電子機器の電池交換や、暖房器具の給油、家の前の除雪など、生活上の簡単な支援であれば、その場で対応する。また、町からのお知らせを、郵便物や回覧板だけでは把握しきれない世帯も多いため、高齢者への町の助成金や臨時給付金などについて、支援員からも改めて説明する。

玄関先の声かけで訪問

が終わることもあれば、家のなかに招かれ、お茶を飲みながら、1〜2時間ほど過ごすこともあり、世間話などから、住民に異変がないかを伺う。事務所に戻ったあとは、その日に訪問した相手の様子を整理し、各訪問先の困りごとや課題、気になったことなどを記録する。後日、同じ人を訪問するときには、その内容を再確認してから訪問先に向く。



サロンに集まれば、お年寄りとも笑顔に

留守などの理由で、訪問先の住民と会えない場合は、訪問日時がわかるように不在票を置いていく。何度も訪れても会えなかったり、室内の電気が点いているのに応答がなかったり、住民の様子をよく確認できないときは、民生委員や行政區長に相談することもある。

住民の悩みごとなどは、社協の福祉活動専門員に報告し、必要に応じて行政區長や民生委員に相談したり、ケアマネジャーや関係機関につないだりしている。

雨の日も、雪の日も訪問に向かう支援員。初めの頃は、訪問を受け入れてもらえず、断られることも珍しくなかった。繰り返し訪問して行くなかで、初めは声をかけるだけだったのが、家のなかに入れてもらえるようになってきた。「家に寄せてもらい、話し終えたときに、来てもらって良かったと言われ、訪問の意義を再確認できた」と、支援員の福田しま子さんは話す。



### 住民同士の生活をつなぐ

各行政区主催で開催されるサロンでは、プログラム作成や進行のサポートを支援員が行う。集会所などで、支援員と住民が一緒に、体操や手遊び、ゲームなどをする。行政区の要望によっては、広報用のチラシ作成もするが、開催日時の設定や会場の管理などは行政区が行う。14年度は、町内の96行政区のうち46行政区で、延べ240回ほど開催され、延べ2700人以上が参加した。

サロンは、健康促進や住民同士の交流をとおしての見守り強化を目的とし



田島地域を担当する支援員の福田しま子さん（右）と星知枝さん（左）

ていて、参加条件に細かな規定はない。65歳未満の人も集まるし、夏休み中の孫と一緒に参加する人もいる。体操などに参加しなくても、同じ場においてご近所さんが体操する様子を眺めたり、おしゃべりをするために来るのも大歓迎だ。足の調子が良くない人がいれば、足に負担の少ないメニューをしたり、人数が少なく予定よりも早く進んでしまふときは、メニューを増やしたり、その場の判断で支援員が柔軟に調整する。支援員もゲームなどに参加しながら、お年寄りとの親交を深めたりする。

行政区によって、サロンの途中や終わりに30分程度のお茶会を設けたり、終了後に参加者同士で食事に出かけるところもある。参加者からは、「昨日は家にいてまったくしゃべらなかつたけど、今日は1か月分笑った」「サロンがないと寂しい」などの感想を耳にすることがある。いつもサロンに来ていないと、会場にいる参加者から欠席者のも

### 住民の生活の一部に

とへ電話がかかることもあるし、区長が車で参加者の送り迎えをすることもある。支援員の星知枝さんは、「住民同士で誘い合っで、交流の場としてどんどん利用してほしい」と話す。

同町で一番多くの人の顔を知っているのは支援員だとも言われている。地域包括支援センターの職員やケアマネジャーから、住民の情報収集のために頼られることもある。

支援員と密に連絡を取り、最も身近で見守る福祉活動専門員の鹿目明奈さんは、「介護サービスなどに頼らなくても生活できる地域になつてほしい。ひとり暮らしのお年寄りも寂しい思いをせず、楽しく長生きしてほしい」と語る。

ひとり暮らしで近所づきあいがいない人や、足腰が弱くて転倒しやすい人など、気になるお年寄りの生活を見守る活動は、被災地域での生活支援に生かせる点も多い。清

### 高齢者見守り支援員 ある1週間の動き

|   | 8:30        | 9:00  | 10:00                   | 11:00       | 12:00 | 13:00    | 14:00                   | 15:00                   | 16:00               | 17:15 |
|---|-------------|-------|-------------------------|-------------|-------|----------|-------------------------|-------------------------|---------------------|-------|
| 月 | 打ち合わせ       | サロン準備 | 移動                      | サロン運営(A行政区) | 移動    | 昼休み      | 訪問準備                    | 戸別訪問(7軒)<br>各世帯10~30分ほど | サロン日誌の記入<br>訪問日誌の記入 |       |
| 火 | 打ち合わせ、サロン準備 | 移動    | サロン運営(B行政区)             | 移動          | 昼休み   | サロン日誌の記入 | 戸別訪問(9軒)<br>各世帯10~30分ほど |                         | 訪問日誌の記入             |       |
| 水 | 打ち合わせ       | 訪問準備  | 戸別訪問(9軒)<br>各世帯5~20分ほど  | 訪問日誌の記入     | 昼休み   | 訪問準備     | 戸別訪問(8軒)<br>各世帯10~20分ほど |                         | 訪問日誌の記入             |       |
| 木 | 打ち合わせ       | 訪問準備  | 戸別訪問(6軒)<br>各世帯10~20分ほど | 訪問日誌の記入     | 昼休み   | 訪問準備     | 戸別訪問(13軒)<br>各世帯5~10分ほど |                         | 訪問日誌の記入             |       |
| 金 | 打ち合わせ       | 訪問準備  | 戸別訪問(5軒)<br>各世帯10~20分ほど | 訪問日誌の記入     | 昼休み   | サロン準備、移動 | サロン運営(C行政区)             | 移動                      | サロン日誌の記入            |       |

支え合い

# S-1 グランプリ 第2回 いがす大賞

被災地の優れた支え合い活動を掘り起し、称え、広く発信するS-1グランプリ。第2回大会（2015年2月15日）の応募者、入賞者のアイデアと実践を、連載形式で紹介していく。



## 応募者紹介 「工作の森」 (宮城県仙台市)

S-1グランプリで「おがる賞」を授賞した「工作の森」。これからの活動の発展性が評価された。工作の森は、社会人の女性2人を中心に、高校生などと活動している任意の団体だ。2013年から、仙台市福沢市民センターで開催されるイベントに参加して、工作ワークショップを行っている。

職場などを通じて出会ったメンバーが、工作が好きだという共通点から、「工作で子どもを笑顔にする取り組みをしよう」と始まった。イベントの半年前からワークショップの内容を考え、工作の材料を用意して下準備をする。年間をとおりして、メンバー同士が頻繁に集まることはできないが、子どもの笑顔を見られることをモチベーションにして、各自で多くの作業を進めている。

ブーメラン、しおり、コマ、折り紙のかざぐるまなどをつくるワークショップは、参加する子どもや、保護者たちから大好評だ。約150人分の材料を用意しても、終了する頃には、ほとんどなくなるといふ。仙台市鶴ヶ谷市民センターで開催される工作の講座で講師を務めることもあり、小学生らと一緒に、動くおもちゃをつくったりしている。

代表の菅井奈々さんは、「けがの心配から、普段はひとりではサミを使わせてもらえない子どもたちがいるけれど、メンバーが見守るワークショップでは、ハサミを使う工作もたくさんやらせてあげたい」と話す。遊びの幅の広げ方も、深く意識している。



S-1では、手作りの飛行機を飛ばした

S-1当日、会場では、メンバーが合計300個の手づくり飛行機を観客席の両端から飛ばし、それらは無料プレゼントとして配布された。飛行機は紙とストローでつくられており、オープン型の会場前から様子を見かけた親子なども飛行機に興味を持ち、会場内はいつそうにぎわった。その場で3つ集めた来場者には、発表後にさらに別の工作おもちゃがプレゼントされた。パフォーマンスのあとも楽しめる、素敵なお土産つきの発表となった。

「子どものころから工作が大好きで、子どもの気持ちで工作しています」  
趣味活動によって、世代を超えた交流を行い、子どもたちの心を豊かにする取り組みに励んでいる工作の森。活動の規模をよりいっそう拡大する道を模索しており、今後の進展が大きく期待される。清

# 仮設住宅内部から住民を支え、あとの世代のために今できることを

宮城県仙台市若林区◎荒井小学校用地応急仮設住宅町内会

会長

安達 董さん



東日本大震災後、宮城県仙台市若林区の荒浜地区から、同区の伊在地区にある荒井小学校用地応急仮設住宅に入居した安達董さん。2014年度から同仮設住宅の町内会会長を務めており、同仮設住宅の住民全体の行事を企画・運営したり、住民の相談にのったりして、住民の生活をサポートしている。

## 仮設住宅自治

町内会で催しを開くことができますが、そういう場に出たがらない人や、出てくることのできない人もいます。元気の有無だけではなくて、性格なども関係してきますから、外に出てきてもらうことは難しい。それでも、会としては、広く、全体に呼びかけるようにしています。

この仮設住宅は、今年度いっぱい閉鎖になりますから、夏祭りなどを行うときも、みんなに「今回が最後なんだな」という意識があります。行事の内容以上に、住民が集う時間がたいせつだと感じます。

東日本大震災によって改めて考えさせられました。浜の村は、昔から何百年ごとに大きな津波被害を受けています。記録を残すものはありますが、それでも、人々は忘れてしまいます。



私は、他地区の町内会長も集まる会議に出席して、震災を語り継ぐための記念碑について話し合うこともあります。何かを残すことで満足せず、どう伝えていくのかを深く考えなければいけないと思っています。

震災の記録を引き継ぐには、国の取り組みや、村規模の語り継ぎが必要です。現代の情報技術を活用して、過去を容易に振り返れるようにする工夫も必要でしょう。またいつか津波が発生したときの被害を少なくするために、東日本大震災の様子を、次の世代、また次の世代へと何百年も伝えなければなりません。そのほかにも、地域ごとのコミュニケーションや実用的な訓練を行うなど、減災の方法を若い人たちにも一緒に考えてほしいですね。(談)



新潟県中越大震災に学ぶ被災者支援

# 復興公営住宅への転居時の支援活動

社会福祉法人 長岡市社会福祉協議会 本部事務局地域福祉課 課長 本間和也

長岡市(旧長岡市地域)においては、4か所に計156戸(うち1か所は、シルバーハウジング住宅として建設)の復興公営住宅が建設された。最後に建設された復興公営住宅は震災から2年9か月後の2007年7月に完成した。

復興公営住宅は、これまでの仮設住宅のような仮の住まいとは異なり、居住期間が長期におよぶ可能性が極めて高い。新たな環境へ適応できるかどうかは、その後の生活の質に大きく影響して来る。しかし、復興公営住宅は、さまざまな仮設住宅の出身者が集まり、入居者同士はそれぞれ面識がないこともあって、すべての人が新たな環境にうまく適応できるわけではないと思われた。

復興公営住宅への支援システムを考えるにあたり、仮設住宅との相違点を予想し、整理を行うと、別表のとおりとなる。

そこで、復興公営住宅に対す

る支援は、入居者への直接支援に併せ、入居者同士の融和、さらには、入居者とその地域の住民との融和が必要と考え、復興公営住宅を取り巻く地域への働きかけを行うことも念頭に置いた。

実際に行った支援活動は次の4点である。

①見守り訪問活動及び体制づくり：永続的な支援システムの構築に向け、復興公営住宅ごとに見守り体制検討会の開催と生活支援相談員による見守り活動の実施

②入居者同士の融合策：入居者が主体となった交流会やサロン活動の企画実施

③入居者と地域住民との融合策：入居者と復興公営住宅の地元住民との交流会の企画実施(地元町内会への働きかけや調整も含む) ※下部チラシ参照

④復興公営住宅内の自助・互助機能の向上策：自治会設置、運営支援(規約づくりや

文書作成等)

実施に向けては、専門機関と地域組織が一体となった協議の場づくりを行い、結果として、各々が協働するという意識となった。たとえば、見守り訪問では、地域包括支援センターなどの専門機関の支援に併せ、地域の民生・児童委員などの地域組織による支援活動も加わる態勢へとつながった。さらに、地域の地区社協が、その地区で実施している住民参加型在宅福祉サービスを紹介するなど、地域社会の中で永続的な支援システムの構築へとつながる事例も出てきた。

しかし、すべての復興公営住宅で、入居開始後まもない時期から、このような支援活動が可能だったわけではない。

復興公営住宅が建設された地域の社会資源や歴史的背景などの関係から、調整や協議に苦慮し、支援活動の開始まで時間を要した例もあった。

別表：仮設住宅と復興公営住宅の対比 [予想からの仮説]

|                 | 仮設住宅  | 復興公営住宅   |
|-----------------|---|--|
| 居住期間            | 短期(一時的)   | 長期(永続的となる場合が多い)  |
| 総入居者数<br>設置箇所数  |   | 入居者数、設置箇所数ともに仮設住宅よりも少ない  |
| 居住のきっかけ         | 被災したことによる、居住空間の喪失                                   | 被災したことにより、居住空間を喪失し、かつ、自力での再建が困難 ※ただし、時間の経過とともに、それ以外の人が居住する場合も考えられる |
| 住民構成<br>(前居住地域) | 広域から集まる場合がある  | 仮設住宅よりもさらに広域から集まる  |
| 住民構成<br>(高齢化率)  | 時間の経過とともに、高率となる可能性がある                               | 仮設住宅よりも更に高率となる場合が考えられる   |
| 住民に対する<br>支援策   | 特別かつ臨時的支援が実施される                                     | 特別かつ臨時的支援が実施される場合もあるが、基本的に従来(平時)のシステムによるサービスが中心となる                 |
| 根拠法令            | ・災害救助法第2条<br>・災害救助法第4条第1項第1号<br>・建築基準法第85条第4項(供与期間) | ・激甚災害に対して対処するための特別の財政援助等に関する法律(激甚法)第22条・(公営住宅法)                    |



**親睦会のお知らせ**

歳末ご多忙の折、皆様方におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。仮設住宅や借り上げ住宅での生活を乗り越え、ようやく新しい住まいにも慣れてきた頃かと思えます。早速ですが、住民の皆様同士の親睦を深める場として、下記の通り親睦会を行いたいと思っております。皆様御多忙とは思いますが、大勢の方の参加を心よりお待ちしております。お話しあわせの上、どうぞお気軽に御参加下さい!!

記

日時 12月17日(日)  
午後1時に長倉住宅中央玄関集合  
1(皆で移動します)

会場 サンライフ長岡  
会費 無料

※お茶・お菓子はこちらで御用意いたします。それ以外の、漬物やお酒のお持込大歓迎です。  
※参加を御希望される方は、下の申込書を切り取り、12/15(金)までに各階の班長又は棟長にお渡し下さい。  
(当日の飛び入り参加も大歓迎です!)

お問合せ：長岡市災害ボランティアセンター 生活支援事務所  
90-1228

親睦会申込書

名前 \_\_\_\_\_ 部屋番号 \_\_\_\_\_

参加人数 \_\_\_\_\_ 人 (ご家族で来られる方は御記入下さい)

入居者と地域住民との親睦会案内

# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸  
市民後見人の養成【2】

仙台市では、10人を超える市民後見人が活動しています。一般に後見人をつける場合、とりわけ市長申し立てでは、生活上で大きな課題を抱えた高齢者や障害者が多いという傾向にあります。権利侵害を解消し、再発防止の必要性から後見人を必要とする場合が多く、予防的に利用することは少ないのが現状です。事前にとりよりは事後的な対応のため、早期に受任してもらう必要性から、これまでは専門職の受任が中心でした。

事前に本人の代理人として、本人意思決定支援を行う人がいれば、事前的な申し立てが広がるのではないかと思います。

専門職が受任した場合は、保護的な取り組みを必要とする場合が多く、身上監護の基本である「本人の意思の尊重」を軽視するわけではありませんが、お金が無く地域生活は無理などの理由で、本人の意に添えないことも起きかねません。しかし、事前に準備をして想定されるリスクを回避することで、より本人の意に寄り添う支援を心がける後見活動が可能となります。その場合、日常生活に近いところで、本人の代理人（代弁者）として、制度やサービスを利用することになるため、専門的な見地よりは住民目線で、本人の想いに共感的に代弁していく後見人がふさわしいのです。このヒントは、実はサポートセンターの皆さんの支援から得たのです。

サポートセンターにおける住民感覚での支援、地域での生活支援の原点も同様で、専門職が表に出てはいけません。市民後見人の活動と共通点が多いと感じます。住民の互助・共助を創り出すことのたいせつさ、地域の福祉力を醸成する楽しさに、専門職は覚醒すべきです。

市民後見人の役割は、今後もっと重要になります。サポートセンターの皆さんのなかからも、市民後見人を輩出してほしい。共感的な代弁者として、本人の最善の利益を希求する後見人は、専門職の見地よりは隣人的な立ち位置の皆さんのほうが好ましい。ライセンスに甘えた専門職に喝！（張本氏みたいな頑固親爺になりました）

## ひとりごと

サポーターのあなたへ



宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上章

### 復興住宅入居後、“元気で生き生き” だったKさんのこと

ひとり暮らしの高齢女性のKさんとの出会いは、阪神・淡路大震災のあとの、避難所での支援がきっかけでした。仮設住宅と復興住宅への引越しの支援や、困りごとの相談も受けました。Kさんが、市営住宅の敷地にできた8階建ての復興住宅に入居したあとは、社会福祉協議会へ「善意銀行」の寄付の申し出の電話をいただいた際に訪問し、長い時間お話を聴きするという関わりになりました。

Kさんの一番の楽しみは“日本舞踊”でした。稽古が楽しいこと、発表会に向けて頑張っていること、などをとても嬉しそうに話してくれました。その復興住宅は、既存の市営住宅の自治会に所属し、民生・児童委員を兼ねていた自治会長が、入居しているひとり暮らし高齢者のことを気にかけ、熱心に訪問していました。また、月に1回は、地域のボランティアグループが、集会所でお茶会や趣味の会を催し、Kさんもよく参加していました。また、集会所には、常駐のL S A（シルバーハウジングに配置された「生活援助員」）もいて、何かあればいつでも対応できる体制になっていました。

「安心の環境」が整っていたとはいえ、ほかの多くの復興住宅では“孤立死”があとを絶ちませんでした。マンションタイプの住宅の場合、“鉄の扉”が気軽な相互の訪問を拒む大きな壁になります。Kさんが孤立せず、元気で楽しく過ごせた要因には、経済的な安定、そしてご自身の前向きな気持ち、日本舞踊という“生きがい”を持っていたことが大きいと感じています。住民自身が「気持ちを前向きに」、「生きがいを持つこと」のたいせつさを思います。自身で生きがいを見い出せない人の場合、支援者が一緒に見い出していくお手伝いをするのが重要ではないでしょうか。

### 平成27年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

#### <市町別事例研究会>

講師：大坂 純（仙台白百合女子大学 人間学部 教授）  
池田昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

【女川町会場】10月23日（金）女川町地域福祉センター  
【気仙沼市会場】10月29日（木）気仙沼保健福祉事務所  
【東松島市会場】11月20日（金）東松島市老人福祉センター

#### <地域福祉コーディネーター基礎・実践研修>

講師：藤井博志（神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 教授）  
杉本士（高島市社会福祉協議会 地域福祉課 地域支援係長）

【気仙沼会場】11月4日（水）・5日（木）気仙沼保健福祉事務所

# 場 の 力

18

障がいの有無も年齢も飛び越えた、みんなの居場所

宮城県◎特定非営利活動法人わらいの館四季

白鳥の飛来地として有名な伊豆沼のほど近くで、赤ちゃんも障害のある人も高齢者も集う場づくりに取り組む事業所がある。宮城県登米市にある「わらいの館四季」だ。

透析技師として、人工透析患者から治療への愚痴を聞かされることが多かった理事長の白石弘美さんは、「苦痛ではなく、楽しさを提供する生活支援をした」と、デイサービスの開設を決断し、病院を退職。たまたまボランティア体験で飛び込んだ富山県の「にぎやか」で、高齢者だけではなく、子どもも若い車いすの利用者も一緒に過ごす取り組みを目的にした。「それが違和感なく、とても楽しかった」ことから、同じスタイルを登米で実



現したいと考え、2006年8月にNPO法人を設立した。

日中は高齢者18人ほど、子ども7〜8人が集う。「みんな一緒にいると、障がいの有無は関係ない空間になる」と白石さんは話す。認知症のある人と、知的障がいのある子どもの会話は、噛み合わないこともあるが、空気を読んで、子どもは高齢者の言うことを聞くという。ケンカが起きたときは、「スタッフだけでなく周囲の高齢者や子どももフォローして、場の力や包み込み、何分か後には笑い合っている」と白石さんは微笑む。

決められたプログラムは一切ない。その日の利用者や今日したいことを考える。プールに行こう！と決めたら、プールを貸切にするのか、車は誰が運転するのか、段取りをみんなで考える。子どもたちには段取りの様子を見せるのも、社会勉強の一つと考えるからだ。

生後7か月の赤ちゃんを預かったときには、高齢者たちが抱っこし合い、赤ちゃんは毎回1周することに。いつもは表情の乏しいおばあちゃんも、満面の笑み。赤ちゃんの表情も明るく変わったというから、相乗効果のほどがわかる。

制度上は介護保険の通所介護・介護予防通所介護(定員20人)、障害者総合支援法の日中一時支援(定員15人)、有料老人ホーム(定員9人)の認可を受け、自主事業として高齢者・障害児者デイサービスとショートステイを行う。これは地域からの要望に合わせて、徐々に事業や定員が増えてきた結果だ。障害の有無も年齢も飛び越えた居場所となるために、スタッフの育成に悩むこともあるが、利用するみんなの笑顔が励みになる。来春には、特別支援学校高等部を卒業する人たちのために、就労継続支援B型事業所を開設しようという準備をすすめる。

赤ちゃんから高齢者までが集う「地域共生ケア」の取り組みは宮城県下に広がり、昨年ネットワーク組織が発足した。地域のなかで、誰もが「自分らしく」過ごせる場を目指して、共生ケアの魅力を発信する。 **小**

## DATA

特定非営利活動法人わらいの館四季  
〒989-4601  
宮城県登米市迫町新田字井守沢  
209-30  
TEL 0220-29-4510  
FAX 0220-29-4310

## お知らせ

### 平成27年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修事業

#### <仮設住宅等からの移行期における研修 フェーズII>

【盛岡会場】10月27日(火) 岩手県民会館

【釜石会場】10月28日(水) 釜石・大槌地域産業育成センター

講師:本間 和也(長岡市社会福祉協議会 地域福祉課 課長)、岩城 和志(淡路市社会福祉協議会 参事 兼 地域支えあいセンターいちのみやセンター長)

#### <仮設住宅等からの移行期における研修 フェーズI>

講師:広田 純一(岩手大学 農学部 教授)

永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)

【釜石会場】11月11日(水) 岩手大学釜石サテライト

#### <分野別研修II>

講師:石黒 秀喜(一般財団法人長寿社会開発センター 審議役)

酒井 保(ご近所福祉クリエイター)

【盛岡会場】11月17日(火) アイーナいわて県民情報交流センター

【釜石会場】11月18日(水) 岩手大学釜石サテライト

### 平成27年度 福島県・地域支え合い体制づくり事業

#### <被災者生活支援の基礎と災害公営住宅への転居期における研修(基礎編)>

講師:永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)

風 保憲(淡路市社会福祉協議会 事務局次長)

【福島会場】10月21日(水)・22日(木) ラコパふくしま

## ☆次号予告 特集「スポーツがつなぐ地域コミュニティ」

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先

●ゆうちょ銀行振替口座

口座番号:02260-9-46303

加入者名:全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み  
を記入してください。

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joh@clc-japan.com

## 編集後記

CLCは、2011年5月から15年3月まで、荒井小学校用地応急仮設住宅で子どもたちの遊び場を設ける活動に取り組んでおり、今回はそのご縁で町内会長さんの安達会にインタビューさせていただきました。集会所には、会長さんがつくった詩が飾られていて、その内容からも海沿いのふるさとへの愛を改めて感じました。(清野)

バックナンバーがホームページで読めます!  
[http://www.clc-japan.com/sasaesai\\_j/](http://www.clc-japan.com/sasaesai_j/)